

公園墓地のさきがけ

開苑55周年

我が家族、
春秋苑に眠る。



横溝正史
作家・1902年～1981年
(署名は本人による)



故・横溝正史氏のご長男・横溝亮一氏。
神戸から東京へ。両親のお墓を探し求めた父。

戦災で神戸のお墓が滅茶苦茶になって以来、執筆の傍ら、父は横溝家の新しい墓所を探していました。でも、乗り物恐怖症で電車に乗れなかった父は、小田急線沿線の、自宅に近い生田に春秋苑ができたことを、開苑から2年経って初めて知ったようです。「良い公園墓地だ」と気に入った父は、昭和35年のお彼岸にお墓を建て、両親の遺骨を納めました。富士を背にした眺めの良い墓所。父がここを選んだことを、僕も嬉しく思っています。

●横溝正史氏のプロフィール 兵庫県神戸市出身。雑誌編集長を辞し、昭和7年より文筆業に専念。信州での結核療養、岡山への疎開を経て、戦後「本陣殺人事件」(第1回探偵作家クラブ賞長編賞)、「謎門島」「悪魔の手帳」など、名探偵・金田一耕助が活躍する本格探偵小説を次々と発表。昭和51年「犬神家の一族」の映画化で一大ブーム到来。今なお国内外で多くの読者を魅了している。

ご利用者の宗教・宗派を問いません

お問い合わせ資料のご請求は

0120-07-4100
<http://www.shunjuen.or.jp/>

小田急線生田駅
高級公園墓地

春秋苑

〒214-0036 神奈川県川崎市多摩区南生田8-1-1

父のお棺に、ぬいぐるみを入れた母。 故・横溝正史氏の墓所について、 ご長男・横溝亮一氏にインタビューしました。

新しいお墓を建てるのが父の親孝行だったんです。

横溝家の墓所は、もともと父の出身地・神戸にありましたが、ところが、戦災で滅茶苦茶になってしまったんです。どうにかお骨だけは東京へ持ち帰ったものの、父の心中には、自分の親のお骨をお墓に納められない「親不孝の痛み」があったのでしよう。それ以来ずっと、新しい墓所を探していました。



父が春秋苑を知ったのは昭和三十五年のことでした。

乗り物恐怖症で電車に乗れなかった父は、小田急線沿線の生田に春秋苑ができたことを、二年近く知らなかったようです。それが、ある日「うちから比較的近いところに、良い公園墓地がある」と僕らに言ったんです。きつと、誰か知り合いに聞いたんでしょうね。



春秋苑を気に入った父は、その年のお彼岸、富士を背にした見晴らしの良い区画にお墓を建てました。ようやく親孝行ができ、満足そうにしていた父の様子を今も覚えています。

父の闘病と執筆活動を母が献身的に支えていました。

作家というのは気難しいもので、構想に熱中している時の父は荒々しかったですね。子供の頃、よく「うるさい」と蹴飛ばされたり、殴られたりしたものです。結核の療養で上諏訪に移り住んだ時代には特に精神的に不安定で、イライラして食事のお膳をひっくり返

したこともありました。重症だった父が戦後まで生き延びて、作家として名を成すことができたのは、働き者で辛抱強い母がいたからに他なりません。

父の葬儀の時、改めて夫婦の深い愛情を感じました。

昭和五十六年、父が亡くなった時のことです。母は、火葬場に小さなぬいぐるみを持ってきていました。それを、お棺の父の顔のところに入れて「おじいちゃん。これを私だと思って、抱いて逝ってちょうだい」と泣くんです。当時七十五歳の母が、本当に可愛らしく見えました。「ああ、良い夫婦だったんだな」と、改めて両親の絆の強さを感じました。その母も平成二十三年に百六歳で大往生し、今は父と神戸の家族、皆で春秋苑に眠っています。



音楽評論家：横溝亮一氏